

学部長インタビュー

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年度の大阪市立大学文学部は、様々な影響を受けました。そこで、今年度のフォーラム人文学では、コロナ禍における授業や大学生活を取材した特集ページを設けました。読者の皆さまが、このページを通して大きな変化のあった1年を振り返り、これからの学びについて自ら考えながら、前向きに進んでいくための機会となれば幸いです。

最初の特集ページは、学部長インタビューです。2020年度の大阪市立大学文学部長・文学研究科長である小林直樹先生に、コロナ禍における文学部に関する様々な質問にお答えいただきました。



Q1. コロナウイルスによって大学はどのような影響を受けましたか。

昨春以来の COVID-19 パンデミックは大学の姿を一変させました。まず授業が一斉にリモート中心に切り替わったことは何より劇的な変化といえます。教授会をはじめとする会議も大半がリモート開催。大学の節目節目を飾る重要イベント、卒業式、入学式、新入生ガイダンス、学園祭等おしなべて中止となり、オープンキャンパスもリモートで開催されました。支援機構の新入生歓迎オリエンテーションも中止です。キャンパスへの入構も制限されましたから、教育・研究のみならず、クラブやサークル活動も甚大な影響を被ったはずで

す。学内から忽然と学生の姿が消えてしまうという異常事態。4月の人影のないキャンパスで桜が美しく散る光景は一生忘れられないことでしょう。

Q2. コロナウイルスの影響を受けて変化した授業や生活の形態についてどのように思われましたか。

リモート授業のよさが発見されたことなどコロナ禍がもたらした正の側面ももちろん認めなければなりません。一方で授業にともなう学生と教員間や学生同士の交流、授業以外の自主的な勉強会やクラブ、サークル活動など、制度的な教育研究活動の外側にある諸活動、日ごろはごく当たり前の存在とされていたこうした活動が、いかに大学の活性化にとって必要なものであるのか、大学特有の魅力的な雰囲気の醸成に不可欠なものであるのか、あらためて認識させられたように思います。

Q3. コロナ禍において文学部生に身につけてほしい能力や生かしてほしい文学部の特性はどのようなものですか。

COVID-19 パンデミックは大学のみならず社会全体に劇的な変化をもたらしました。社会の価値観も今後、間違いなく変化していくことでしょう。

一方、文学部の学問は、時間的にさまざまな時代に遡行したり、空間的にさまざまな地域に越境したりすることを通して、異なる価値観を持つ他者を見つめ、対話を交わすことを常としています。そうした学問を学ぶことによって、現代の自分たちとは異なる価値観の存在を知り、現代の社会のあり方や価値の体系が必ずしも絶対的なものではないこと、それに変わるべき他のあり方や価値の体系が存在しうることを、ぜひ理解できるようになってほしいと思います。現在のような社会のあり方や価値観が揺らぐときこそ、文学部の学問、人文学は必要とされているのです。

Q4. コロナ禍、ポストコロナ社会で、これからの文学部の存在意義はどこにあるとお考えですか。

コロナ禍が終息しても、21世紀は今後も想定外の自然災害や疫病などの危機が何度も訪れる可能性が高いと考えられます。想定外の事態が起こった後の社会状況に柔軟に対応していくためには、繰り返しになりますが、人びとが自明と思っている価値の体系とは別の価値観の存在を知り、現代の社会のあり方や価値観が必ずしも最上のものとは限らないということを理解していることが不可欠です。これからの時代こそ、文学部で学んだ学問が真に役立つ時代、文学部の時代であると確信しています。